

コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉

雪 嶋 宏 一

1. はじめに

スイスの博物学者コンラート・ゲスナー (Gessner, Conrad, 1516-1565) が29歳で著した『*Bibliotheca Vniuersalis* 万有書誌』は西洋近代書誌学の礎として広く知られている。ヴェリシュ (Wellisch, H.H.) は、ゲスナーが『万有書誌』第1巻の序文で説明している本書の構想 (*4v-6v) について簡潔にまとめている¹。それによれば、ゲスナーは『万有書誌』を第1部を著者名目録、第2部を分類目録、第3部を主題索引とする3部の体系からなる書誌として企画し、1545年に第1部を上梓した² (すなわち第1巻，以下BV1と略，図1)。第2部は彼自身が体系化した21分類からなる『*Pandectarum* 総覧：万有書誌第2巻』(第1～19類を収録)として1548年に刊行したが(以下BV2-1)³，そこには第20類医学と第21類神学を収録できなかった。そのため、翌年1549年に第21類を『*Partitiones Theologicae* 神学の部』として刊行した(以下BV2-2と略)⁴。しかし、第20類医学の部はついに刊行できず、ゲスナーの分類目録は未完に終わった。さらに、第3部となるはずであった索引編の刊行もかなわず、BV2-2巻末に簡略な主題索引を付すに止まっ

た。このように本書は未完成であったが、ゲスナーの代表的著作であることに違いはなく、同時代および後世の学者に与えた影響は計り知れず⁵，ゲスナーが「Father of Bibliography 書誌学の父」と称される所以となっている⁶。

ところが、我が国におけるゲスナーへの言及では『万有書誌』は正確に理解されているとは決して言えない。その理由は、BV1には何人の著者が収録され、何部の書物が著録されたかという根本的な問題について様々な見解が見られ、その根拠が明確にされていないからである。また、『万有書誌』ではどのような情報源に基づいてどのような書物を収録したのかという点についても十分な認識がもたれていないように思われる。欧米のゲスナー研究を通覧しても、ゲスナーがどのような書誌的な源泉を利用して著者と書物を収録することができたのか、ゲスナーの編集方法はいかなるものであったかなどの点については決して十分に明らかにされているとは言えない。しかしながら、BV2-1、BV2-2については分類体系などについて研究者の関心が高いため比較的多くの研究が発表されている⁷。そのため、本稿ではBV1を中心にしてこれまであまり明らかでなかった収録された著者の人数、それらの情報源、書物の記述方法、

図書館の所蔵情報，そこから考えられる本書の特徴について論及してみたい。

2. 『万有書誌』編纂に至るゲスナーの活動

ゲスナーの生涯についてはハンス・フィッシャー (Fischer, Hans) によって詳細に研究されており，彼の著書『ゲスナー：生涯と著作』も邦訳が刊行されているため⁸，本稿ではゲスナーの生涯を4期に分けて簡単にまとめ，その上で『万有書誌』編纂に至る彼の活動について触れておこう。

ゲスナーの生涯を大きく分けると，第1期が1516年の誕生から1531年までが基礎教育時代で，ラテン語，ギリシア語，人文主義を習得している。第2期は1532年から1540年までで，各地への留学とローザンヌでの教職時代で，ラテン語のほかにギリシア語，ヘブライ語，古典学，医学を修め，医師を目指した時期である。その後はチューリヒで医師・教授として仕事しながら博物学者となる時代であるが，その前半となる1541年から1550年までを第3期として，ギリシア語辞典，植物学書，『万有書誌』などを上梓した時期とする。特に，『万有書誌』はこの時期の最大の著作である。第4期は1551年から亡くなる1565年までであり，チューリヒの市医そして聖堂参事会会員として公職に従事しながら大著『動物誌』などの博物学書を次々に発表して，博物学者として大成した時期である。彼は『動物誌』第5巻の完成を見ることなく亡くなったが，友人らによってゲスナー没後22年を経た1587年にそれは刊行された。

ゲスナーは1534年に留学の途上パリに滞在し，古典文献を渉猟しているが，この時に『万有書誌』のアイデアが芽生えたとみなされている⁹。

また，25歳頃つまり1541年頃までには『万有書誌』を具体的に構想していたとされる¹⁰。1541年にはゲスナーはバーゼルで医学の博士号を修得して故郷チューリヒに帰還して，医師として仕事を開始する傍ら学者として研究生活に入った。ゲスナーはこの年から著編書・校訂書を次々と上梓している。それらの中で『*Lexicon Graecolatinum* ギリシア・ラテン語辞典』の改定版（バーゼル，1543年）には自身の著作目録を加えている¹¹。また同年には『万有書誌』の情報源の一つであるストバイオス (Stobaeus) 『*Sententiae ex thesaurus Graecorum* ギリシア語宝典からの格言集』を校訂しており，『万有書誌』に繋がる執筆活動をしていたことがわかる。

さらに，1543年春のフランクフルト (Frankfurt am Main) 大市にチューリヒの印刷業者で友人のクリストフ・フロシャウアー (Froschauer, Christoph, 1490-64) とともに出かけた¹²。フランクフルトの大市は印刷業者や書籍販売人，本を求める学者たちが多数集まる場所であり，最新の出版情報を収集することができた。ゲスナーは大市でドイツ，フランス，イタリアの印刷業者や書肆から刊行書・販売書の目録を多数入手したと思われる¹³。

その時ゲスナーがフランクフルトで知り合ったのがオランダの人文主義者でありヴェネツィア駐在スペイン大使ディエゴ・ウルタード・デ・メンドーサ (Mendoza, Diego Hurtado de, 1503-75) の司書を務めていたアルノルドゥス・アルレニウス (Arnoldus Arlenius Peraxylus, オランダ語名 Arnout van Eynhouts, ca.1510-82) である。彼はゲスナーと同じくギリシア古典学を研究する学者であり，

メンドーサのためにギリシア語写本を収集し目録を作成していた¹⁴。こうして、アルレニウスはゲスナーをヴェネツィアに招待したのである。

ゲスナーは1543年夏にイタリアへ訪書旅行に出かけた¹⁵。実際、ゲスナーはBV1の中で1543年にヴェネツィアで人文主義者ジョヴァンニ・バッティスタ・エグナツィオ（Ioannes Baptista Egnatius, イタリア語名 Giovanni Battista Egnazio）に会ったと述べている（f. 387r）。また、ヨハネス・クリュソストモス（Iohannes Chrysostomus）の項目では、彼は17カ月前にヴェネツィアでクリュソストモスのギリシア語版を校訂しているアルレニウスと話したと述べている（f. 407v）。これらのことからイタリア旅行が1543年であったことが証明されよう。

ゲスナーはヴェネツィアに滞在しながらアルレニウスやメンドーサからイタリアの図書館におけるギリシア語写本の情報を得て、イタリアに所在する豊富な文献、とりわけギリシア語写本をヴェネツィアのいくつかの図書館で閲覧し、さらにボローニャに足をのぼして聖救世主図書館をも訪問しているが¹⁶、フィレンツェとローマには赴いた様子はなく、メディチ家の図書館やヴァティカン図書館の蔵書目録を参照している。イタリア訪書の成果はBV1の随所に見られる。

さらに、原稿を印刷する最中の1545年夏には、アウクスブルクの豪商フッガー家のヨハン・ヤーコプ・フッガー（Fugger, Johann Jakob, 1516-1575）による家庭教師兼図書館管理者としての招聘に応じてアウクスブルクへ赴いている¹⁷。その時、フッガー家の図書館を利用する機会をえて豊富な文献を閲覧している。結局、

ゲスナーはフッガーからの招聘を受け入れることなくチューリヒに帰還するが、フッガー家の図書館のギリシア語写本についても本書の中で何度も言及している¹⁸。また、1545年に刊行された本についても何度も言及しているため¹⁹、校正ゲラに多数の追加を行ってBV1を1545年9月に上梓したとみなされよう。

3. 問題の所在

まず初めに、BV1には一体何人の著者が収録され、何部の図書が掲載されているのであろうか。従来の説を見てみよう。

『万有書誌』の基礎研究として知られるエッシャー（Escher, Hermann）の論文では著者の人数は約3,000名とされている²⁰。初期の体系書誌（systematic bibliography）の歴史を論じたベスターマン（Besterman, Theodore）はギリシア、ラテン、ヘブライ語の書物約12,000点が掲載されているとみなしたが、収録された著者の人数を明らかにしなかった。しかし、1555年刊行のヨジラス・ジムラー（Simmler, Josias, 1530-76）編集の『Appendix Bibliothecae Conrad Gesneri コンラート・ゲスナーの書誌の補遺』（Tuguri: Christophorum Froschouerum）を含めた全4巻で約3,000名の著者、約15,000点の書物が収録されたとみなした²¹。その後、マイアーヘファー（Mayerhöfer, Josef）はBV1には約12,000点の書名が収録されているとみなした²²。フィシャーはゲスナーの伝記の中で約3,000名の著者と数万点の書物が収録されていると述べた²³。一方、バーンスタイン（Bernstein, Lawrence F.）は約3,000名の著者による10,000点近い書物が収録されているとする²⁴。ヴェリシュも約3,000人で約

10,000の書物とみなした²⁵。一方、ゲスナーの詳細な研究を発表したセッライ（Serrai, Alfredo）は少なくとも5,000人と推測したが²⁶、BV1に掲載されたタイトル数は明記していない。しかし、BV2-1とBV2-2に収録された項目（loci：主題を入れる場所）を分類の細目（titulus, pars）ごとにすべて数えて40,119という数字を得ている²⁷。これにより、BV1には医学を含めないでも4万点以上の書物が収録されている可能性を示した。

一方、わが国では早くも江戸時代後期に宇田川榕菴（1778-1846）によって「孔刺需斯，健斯涅律私」と漢字で表記され植物学筆頭の学者としてゲスナーが言及された²⁸。明治時代には南方熊楠が「御承知ごとく、ゲスネル、スイス人、貧究中に博学せし人にて神需の名あり」と書簡で伝え、日記に「吾れ欲くは日本のゲスネルとならん」と記したが²⁹、『万有書誌』への言及はなかった。『万有書誌』への言及は戦後になって見られるようになったようである。戸田慎一は『万有書誌』に至るゲスナーの伝記を比較的詳細に記述しながらも『万有書誌』そのものの内容には立ち入らなかった³⁰。渋川雅俊は「当時その存在が知られていた書物を、ラテン語に限らず、ギリシア語やヘブル語の書物など約1,000点も収録している」と述べた³¹。本稿の筆者も「本書には約3,000名の著者によるギリシア・ラテン・ヘブライ語の文献約12,000書が収録されている。（中略）写本、印刷本、出版予定の書物など彼が知り得た書物が収録された」と述べたことがある³²。筆者の推測はBV1の序文に続いて掲載された姓名順の索引に収録された著者名が約3,000名であったことと、ベスターマンが挙げた書物の点数を根拠にした。

ところが、近年、藤野幸雄は「ヨーロッパ各地に残された写本の総合目録であり、『すべての時代、あらゆる言語、すべての領域』を網羅して、写本図書の存在を確認し、これを情報として後世に残そうとしたものである」と述べ数量には言及しなかったが、本書がラテン語、ギリシア語、ヘブライ語を中心とした写本目録とみなした³³。さらに最近では図書館情報学の教科書『図書及び図書館史』の中で中山愛理は「この世界書誌はヨーロッパ各地に残されたラテン語、ギリシア語、ヘブライ語などの写本約12,000点の情報を集めアルファベット順および主題別に編纂して、1545年に刊行された」と述べている³⁴。

以上のように、欧米でも日本でも『万有書誌』がどれだけの情報を収録しているかという点について正確な数字は把握されておらず様々な見解があることが判明する。これらを勘案すれば欧米では収録された著者は約3,000名～5,000名、書物は約10,000～12,000点という説が有力であったが、書物については4万点以上という数字が示されるようになっている。一方、欧米の研究では収録対象はギリシア、ラテン、ヘブライ語の本としているが、わが国では最近では写本のみを対象としたという説まで登場しており問題である。

4. BV1の構成

BV1を分析するに当たり本書の内容を書誌学的に通覧してみよう。今回筆者が使用した底本はスイスのマイクロ資料出版社 IDC が出版したマイクロフィッシュ版であり、マイクロから全ページを複写したものを使用した。そして、判読しづらい部分を早稲田大学図書館所蔵本で

補った（図1）。

本書は二折判（フォリオ）で全650葉、折丁構成は⁸, A⁶ B⁴ a-z² A²B C-Z Aa-Zz 2a-2z AA-MM⁶ NN⁸となる。^{*}1recto（以降 recto は r と略）は標題紙であり注²に示すタイトル、商標（device）、刊期が印刷されている。商標はフィシャー（Vischer, Manfred）が図示する Offizin Froschauer 6と一致する³⁵。^{*}1verso（以降 verso は v と略）には読者への言葉（AD LECTORES）がある。^{*}2r から^{*}7r までが神聖

ローマ皇帝の助言者レオンハルト・ベック（Leonhard Beck von Beckenstein, ラテン語名 Leonardus Beckh a Bechhenstain）へ宛てたゲスナーによる序文である。古代アレクサンドリアの図書館以来近年のハンガリー王コルヴィヌスのコレクションに至るまで数多くの書物のコレクションが形成され失われてきたことを述べ、その後本書の3部構成について述べている。^{*}7v にはレオンハルト・ベックの紋章が印刷されている。^{*}8は白紙葉（マイクロ版では

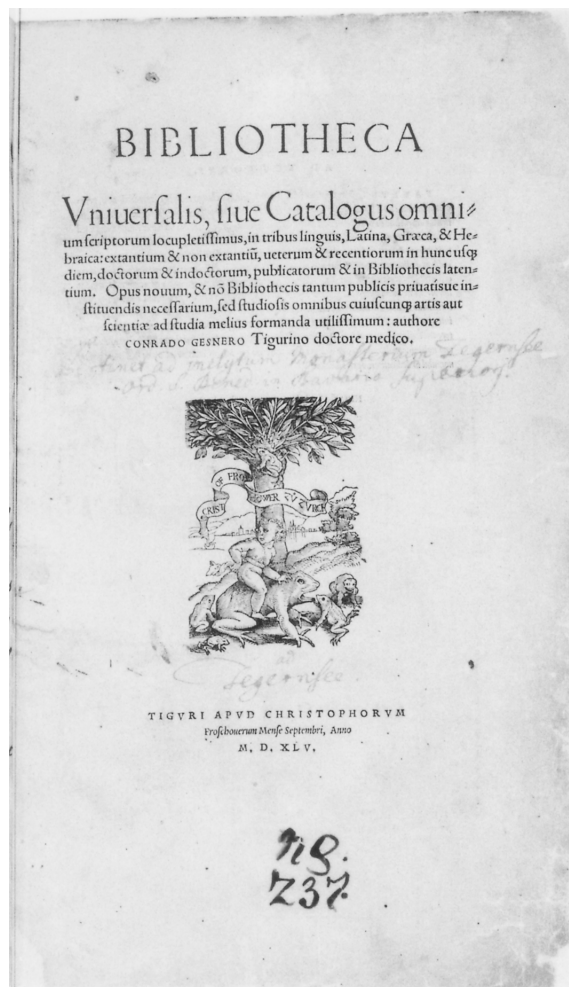


図1 コンラート・ゲスナー『万有書誌』第1巻標題紙 早稲田大学図書館所蔵（F026-36）

削除)。A1r から B4r までが著者名の姓あるいは出身地名から見出しとなる著者の名前を検索する索引で、3 欄組である。B4v は白紙。a1r から本文が始まり NN7v まで続き、葉番号が [1]-631 まで印刷されている。本文は著者の名前順におおよそ配列されているが、正確なアルファベット順になっているわけではなく、多少の混乱がしばしば見られる。また、著者名はラテン語の主格か属格となるが、その語尾変化の違いは配列上では考慮されていない。最終葉の NN8 は白紙葉（マイクロ版では削除）。

アルファベットの A-Z は表 1 のような葉番

号に割り当てられているため、葉数をページ換算し、本文 631 葉（1262 ページ分）全体のページ数でそれぞれが占める割合を占有率として % で示した。

A と I がそれぞれ約 20% ずつを占め、両項目で全体の 40% の分量となっていることが判明する。それに続くのは C, H, P であり、これらの合計が 21.9% であるため、これらで全体の 6 割以上となる。このような比率は名前の数の多寡と関係するであろうが、そればかりでなく各項目の記述とも大いに関係しているはずである。実際、A-I までで本文の 75.1% を占めおり、本

表 1：BV1 における A-Z のページ分量とその占有率

	葉数	折記号	ページ分量	占有率 (%)
A	1 r -126 v	a1r- x6v	252	20
B	127r -150r	y1r- 2B6r	47	3.7
C	150v -191v	2B6v- I5v	83	6.6
D	192r -217v	I6r- O1v	52	4.1
E	218r -239r	O2r- R5r	43	3.4
F	239v -262v	R5v- X4v	47	3.7
G	263r -295v	X5r- Dd1v	66	5.2
H	296r -350v	Dd2r- Nn2v	110	8.7
I	351r -474v	Nn3r-2k6v	248	19.7
K	475r	2l 1r	8 lines	0
L	475r -489r	2l 1r-2n3r	29	2.3
M	489v -514v	2n3v-2r4v	51	4
N	515r -525r	2r5r-2t3r	21	1.7
O	525v -533v	2t3v-2u5v	17	1.3
P	533v -574v	2u5v- DD4v	83	6.6
Q	575r -576r	DD5r- DD6r	3	0.2
R	576v -589r	DD6v- GG1r	26	2.1
S	589v -606v	GG1v- II6v	37	2.9
T	607r -621r	KK1r- MM3r	29	2.3
V	621v -629r	MM3v- NN5r	17	1.3
X	629v -630r	NN5v- NN6r	2	0.2
Y	630r	NN6r	2 lines	0
Z	630v -631v	NN6v- NN7v	3	0.2

書の後半となる K-Z のページ数がかなり少ないことが判明する。このようなアンバランスはやはり項目の選択と記述内容に大いに関係しているはずである。

5. BV1の分析：収録された著者の人数

BV1の見出しの人名項目について調査して収録された著者の人数を算定してみよう。本書の序文に続いて著者名索引がある。この索引に掲載された著者名は2,850名である。従来から収録著者数を約3,000名とみなしていたのはこの索引に掲載された人数の近似値であることが判明する。実はここには Aristoteles, Herodotus, Plato, Strabo, Xenophon あるいは Beothius などの古代人の名前が相当数収録されていないため、この索引だけでは全体の著者の数は把握できないのである。したがって、本文の人名見出し項目をすべてカウントしてみなければ収録された人数は明確にはならない。

次に全項目を検討すると項目の内容は以下のように大きく4種類に分類できる。

- 1) 著者名のもとにその略伝、著書の記述、その内容の解説や目次を記述する項目
- 2) 著者名のもとにその作品や書簡が他人の著作の中で言及されていることを簡略に記述する項目
- 3) 著者について「別な人名を見よ」という単純なクロスレファレンス³⁶（項目の末尾等に示された「別な人名をも見よ」というクロスレファレンスは除く）
- 4) 名前について一般的な説明をする辞典的項目

これらの項目の中で、第2の項目については少し説明を加えておこう。ゲスナーは本書の標題で収録範囲を明記している（注2参照）。それによれば本書では次のような書物を収録するという。

万有書誌、あるいはラテン語、ギリシア語、ヘブライ語の3言語によるすべての著者たちの内容の最も豊かな目録：今日に至るまで現存しているもの、現存しないもの、古いもの、最近のもの、学者によるもの、学者でない者によるもの、出版されたもの、図書館に埋もれているもの。

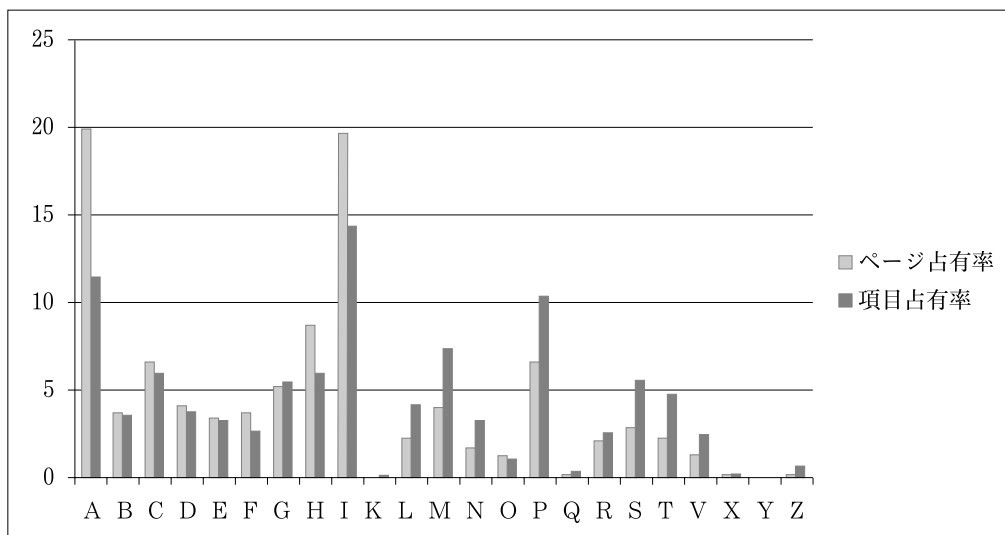
つまり、当時の学術的な言語である3言語によって書かれたあらゆる書物を収録するものであり、それには現存していないものまで含むというのである。そのため、彼は過去の文献に記載されているが書物が伝わらない著述家についてアテナイオス (Athenaeus, of Naucratis), ストバイオス (Stobaeus, Ioannes), スーダ (Suda, Suidas), キュプリアノス (Cyprianus, Thascius Caecilius) などの古典文献を博搜して、そこで言及されたり引用された人々について広く収録している (BV1の序文*3rを参照)。このような方法はゲスナー以前の書誌にもそして以後の書誌にもほとんど見られないものではなかろうか。

これらの項目から著者の実数を算定するためには全項目から第3, 第4種を除けば明らかになるはずである。しかしながら、1項目の中で複数の著者について言及する箇所もいくらかあるため (例えば, f. 499v, Marsyas Pellæus; f. 600r, Simonides 参照), 著者の数を正確に

表2：BV1のA-Zの項目数とその占有率

	項目数	クロスレファレンス数	名前解説項目数	実質項目数	占有率 (%)
A	617	18	0	599	11.5
B	193	7	1	186	3.6
C	333	18	2	314	6
D	205	7	1	197	3.8
E	180	8	2	170	3.3
F	148	7	2	139	2.7
G	299	4	7	288	5.5
H	323	11	2	310	6
I	804	45	5	754	14.5
K	4	0	0	4	0.1
L	226	8	4	214	4.2
M	397	14	0	383	7.4
N	175	6	0	169	3.3
O	67	8	1	58	1.1
P	579	32	4	543	10.4
Q	26	2	1	23	0.4
R	142	8	0	134	2.6
S	313	18	2	293	5.6
T	267	12	3	252	4.8
V	136	7	1	128	2.5
X	15	0	0	15	0.3
Y	1	1	0	0	0
Z	39	4	0	35	0.7
合計	5489	245	38	5206	100

グラフ1：BV1のA-Zのページ占有率と項目占有率の比較



算定するのは実際には非常に複雑である。そのため、本稿ではこのような項目がごく少数であることから、それらも1項目1名と便宜上みなすことによって、算定された項目数をもってBV1に収録された著者の人数の近似値とみなすことにした。

表2はBV1の人名見項目数を計算した結果である。A-Zのそれぞれの項目数とそこに含まれるクロスレファレンス数と名前解説項目数を示し、それらを全体の項目数から除いた数を実質項目数とした。今回の調査で、全部で5,481の人名項目が掲載されていることが判明した。そのうちクロスレファレンス数が245、名前解説項目数が38であった。つまり、 $5,489 - (245 + 38) = 5,206$ という項目数が算定される。こうして、BV1に収録された著者の数は、これまでのように約3,000名ではなく、セッライが推測した少なくとも5,000名という数字に近い約5,200名であることが明らかになった。

A-Zまでの実質項目の占有率を見ると、AとIが11%を超える率であり両者で25%を超えているが、ページ数の占有率40%と比較すると意外にも低く、スペースと比較して項目数が少ない。一方、Pは項目数では10%を超えるがページ数では6.6%に過ぎず、項目の占有率が7.4%に達するMはページ数では4.0%に過ぎない。続いて6%のCとHであるがページ占有率では6.6%と8.7%でありAとI同様にスペースに比して項目数がやや少ない。その他5.6%のSではページ占有率はわずかに2.9%であるが、5.5%のGでは5.2%となりSと逆の傾向である。すなわち、BV1は前半のA-Iの項目数の占有率が56.8%であり、後半のK-Zが43.2%となり、ページ数の占有率とは逆転した現象を示してい

る（グラフ1参照）。つまり、本書は前半のほうが項目の記述が比較的長く、後半のほうが項目の記述が短くなる傾向がある。すなわち、ゲスナーは本書の前半と後半で執筆方針を変えて後半には項目の記述を全般的に短くしていることが明らかになる。

その傾向はさらに実際の項目の長さを比較しても明らかである。表4に8ページ以上記述された人名を取り上げたが、それらはA-Iまでの前半がほとんどで、後半ではかろうじてMartin Lutherがあるのみであった。ルネサンス時代に大変人気を博したキケロ（Cicero, Marcus Tullius）でさえ4ページ（f. 495v-497r）に過ぎず、プラトン（Plato）は2ページ（f. 563v-564r）、プルタルコス（Plutarchus）でも3ページ（565r-566r）、著作の大変多いトマス・アキナス（Thomas Aquino）でさえわずか4ページである。この記述の精粗は本書の前半部分と後半部分における執筆が計画通りに進まず、後半に至って時間的な余裕が無くなり、執筆を急いだからであろう。

6. BV1の情報源について

16世紀当時ヨーロッパには5,200名もの著者を収録した書誌も事典もまだなかった。図書館の蔵書数ですら最大でも数千冊であり、1万冊に達するところはまだ存在しなかった。その時代においてゲスナーはどのようにしてこれだけの膨大な著者名を知り得たのであろうか。ゲスナーは本書序文の最後（*6v）で調査した図書館と参考文献を明記している（図2）。

ギリシア語書の整備されたイタリアの図書館で、それらの目録を私が持っているか私自身

が見たものは以下の通りである。
 ローマのヴァティカンあるいは教皇 [図書館]。
 フィレンツェのメディチ [図書館]。
 ポローニャの聖救世主 [図書館]。
 ヴェネツィアのベッサリオン [図書館], 聖
 ヨハネ&パウロ [図書館], その他。
 ヴェネツィアでは皇帝の大使貴顕なるディエー
 ゴ・ウルタード・デ・メンドーサの [図書館]。

あちこちばらばらになっていたものを私が集
 めた書物³⁷

ラファエレ・ウォルテッラヌスの『人間の学』
 (Maffei, Raffaele. *Commentarius urbanorum*.
 Basel: Froben, 1530)。 (Gessner's PL 230)
 ベルナルドゥス・ルティリウスの『古の法律
 家の法律について』 (Rutilio, Bernardo.
Iurisconsultorum vitae, veterum quidem.
 Basel: Robert Winter, 1539)。 (Gessner's

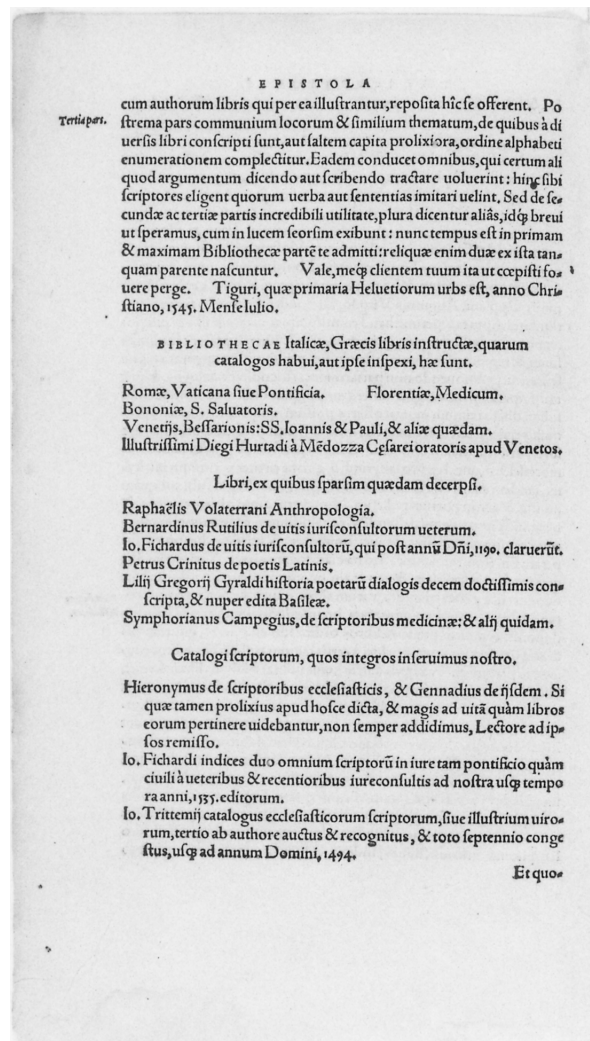


図2 ゲスナー『万有書誌』第1巻 *6v 図書館と参考文献一覧 早稲田大学図書館所蔵 (F026-36)

PL 325)

ヨハネス・フィカルドゥスの『1190年以降に有名になった法律家の法律について』（Fichard, Johann. *Recentiorum vero, ad nostra usq(ue) tempora*. Basel: Robert Winter, 1539）。〔上記 Rutilio と合刻〕（Gessner's PL 325）

ペトルス・クリニトゥス、『ラテン詩人について』（Pietro Crinito, *Viri undecunque doctissimi*. Basel: Heinrich Petri, 1532）。

リリウス・グレゴリウス・ギラルドゥスの『詩人たちの博学なる対話10編が記録された歴史』、その最近のバーゼル版（Lilio Gregorio Giraldi, *Historiae poetarum tam Graecorum quam Latinorum dialogi decem*. Basel: [Michael Isengrin], 1545）。

シンフォリアヌス・カンペギウス、『医術及びその他の著者たちについて』（Champier, Symphorien. *Libri VII de dialectica, rhetorica, geometria, arithmetica, astronomia, musica, philosophia naturali, medicina & theologia*. Basel: Heinrich Petri, 1537）。

我々が我らのために注意を払った全ての著者たちの目録

ヒエロニウムス『聖職にある著者たちについて』（Hieronmus, Sophronius Eusebius. *Scriptorum ecclesiasticorum vitae*. Basel: Andreas Cratander, 1529）、ゲンナディウス同書（Gennadius, Massiliensis. *Illustrium virorum catalogus*. Basel: Andreas Cratander, 1529）〔上記ヒエロニウムスに合刻〕。（中略）

ヨハネス・フィカルドゥスの『教会法と市民法における昔の法律家から我々の時代に至

るまでの最近の法律家のすべての著者たちの2つの索引』、1535年版（Fichard, Johann. *Virorum qui superiori nostroque seculo eruditione et doctorina illustres atque memorabiles fuerunt, vitae*. Francoforti: Christianus Egenolphus, 1536）。（Gessner's PL 139）

ヨハネス・トリテミウスの『聖職にある著者たちあるいは貴顕なる人々の目録』、さらに著者によって増補され点検され、そして、1494年までまる7年間も集められたもの（Trithem, Johann. *De scriptoribus ecclesiasticis*. Basel: Johann Amerbach, 1494 [British Library. Incunabula Short Title Catalogue, it00452000]）。

また、BV2-1のf. 21r (d3r) では図書館の索引 (indices) について言及している。

私がこの著作の第1巻で同様に称賛しながら利用したいくつかの秀でた図書館の索引、

ローマのヴァティカンあるいは教皇 [図書館] 極めて豊富なギリシア語書 [索引]。私はラテン語書 [索引] はもっていない。

フィレンツェのメディチ図書館ではギリシア語書 [索引]。

ボローニャの聖救世主図書館ではギリシア語書とラテン語書 [索引]。

ヴェネツィアのベッサリオン、聖ヨハネ&パウロ、聖アントニオの図書館のギリシア語書とラテン語書索引。

アウクスブルクの図書館ではギリシア語書索引。

これらの図書館の他にゲスナーはウィーンとハイデルベルクの図書館所蔵の写本についても言及している（ウィーン図書館は f. 271r, Georgius Pruer 参照, ハイデルベルクの図書館は f. 499v, Marsilius de Ingen 参照）。

以上のようにゲスナーは当時としては極めて稀なことに自らが調査した図書館、図書館蔵書目録、参考文献について明記した。これらの文献や図書館への参照は BV1 の随所に見られ、その都度文献の典拠を記載している。しかしながら、BV1 を通覧するとゲスナーが参考にした文献はこれらだけでなく、上述のようにスーダ（ゲスナーは Suidas と記載）、アテナイオス、ギリシア詞華集、キュプリアノス、ストバイオスなどが全巻を通して参照されている。

ゲスナーがこれらの文献の中でどれをよく参照したかという傾向を知るため、各項目で参照文献を調査した。この場合の参照回数は1項目に複数の文献が参照された場合には最初の参照文献のみをカウントしており、全参照回数ではない。また、トリテミウス（Trithemius, Johannes, ドイツ語名 Tritheim, Johann, 1462-1516）は他の参考文献とは別格に扱われ、該当項目の欄外余白（outer margin）に T., T. cl., T.M.として明記しているため（序文*7r でこれらの略語について説明している）、これらの略語があるものについてはトリテミウスを優先した。トリテミウスの書誌では著者の配列は編年順であるため、ゲスナーはその箇所を明確にするために T. cl., T.M. の後にトリテミウスが記した没年を記載している。また、トリテミウスの記述に疑問がある場合には余白には記述せず、本文中で指摘している。表3が参照回数をカウントした結果である。

なお、これらは全巻にわたって参照された主要な参考文献であり、実際にはその他にもケケロ、ディオゲネス・ラエルティオス（Diogenes Laertius）、ガレノス（Galenus, Claudius）、15世紀のアンジェロ・カルレッティ（Carletti de Clavasio, Angelo）による神学辞典 *Summa Angelica*、アンジェロ・ポリツィアーノ（Poliziano, Angelo）など様々な文献が引かれているが、ここではそれらは省略した。なお、『万有書誌』における文献の引用関係は引用文献索引を作成して考察する必要がある、今後の課題としたい。

この表から判明するように最も多く参照されているのはトリテミウスである。彼はドイツ中部のシュボンハイム修道院長で多彩な才能を発揮して様々な著書を執筆。彼はヒエロニムスやゲンナディウスを参考にしながら、後1世紀後半の聖クレメンス1世（Clemens I）から1494年までのキリスト教聖職者による文献の伝記的書誌を作成して1494年に上梓した。その後1512年にパリ版、1531年にはケルン版（図3）が刊行されており、ゲスナーはケルン版も参照している（f. 418v）。

ちなみに、トリテミウスに収録された著者は約1,000名といわれているが³⁸、今回の調査では883名を確認した。それ以外にも第2、第3の参照文献となるケースがあるため、ゲスナーはトリテミウスに収録された著者の大半を収録していると推測出来る。

次に数多く参照されたのはスーダで344名である。スーダは10世紀に東ローマ帝国で編纂されたギリシア語の事典である。ゲスナーが利用したスーダの版は1544年バーゼルのフローベン版である（f. 604v）。収録された古代ギリシア

表3：BV1における文献別の参照回数（各項目で最初に示された文献のみをカウント）

	項目数	トリテ ミウス	スーダ	アテナ イオス	ギリシア 詞華集	キュプリ アノス	ストバ イオス _S	マッフ ェイ	ヒエロ ニユムス	ゲンナ ディウス
A	617	95	22	48	30	0	15	17	0	0
B	193	52	0	1	4	0	0	0	6	0
C	333	37	4	23	7	7	12	6	4	0
D	205	17	36	37	10	5	10	3	6	0
E	180	25	17	34	7	3	5	4	4	3
F	148	26	0	0	0	6	0	3	1	2
G	299	79	1	3	0	3	0	8	5	1
H	323	78	21	33	6	5	10	6		5
I	796	155	8	6	3	33	1	5	5	3
K	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
L	226	33	14	10	6	8	0	1	2	0
M	397	40	25	32	12	10	0	4	6	2
N	175	25	15	16	9	5	5	1	0	2
O	67	13	4	1	2	0	2	0	2	1
P	579	76	82	36	19	13	11	10	10	7
Q	26	1	0	0	0	4	0	1	0	0
R	142	49	1	3	2	3	0	2	0	0
S	313	31	36	21	6	11	8	4	5	0
T	267	28	46	11	9	5	7	1	7	2
V	136	22	3	2	0	9	0	4	1	6
X	15	0	2	4	0	0	0	0	0	0
Y	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Z	39	1	7	4	5	1	0	0	0	0
合計	5481	883	344	325	137	131	86	80	64	34

人についてはスーダを典拠とする場合が多い。

続いて回数が多いのがアテナイオスで325回。アテナイオスは後2世紀末に活躍した著述家で、ローマ皇帝コンモドゥス（Commodus, Lucius Aurelius, 161-192）の死後数年以内に開催された各分野の賢人たちを集めた饗宴についての膨大な記録『Deipnasophistai 食卓の賢人たち』を執筆し、約1,250人も著述家を引用したという³⁹。ゲスナーが利用したアテナイオスの版は1535年バーゼルのヨハン・ヴァルダ

（Walter, Johann）版である（f. 98v）。彼はアテナイオスを頻繁に参照してギリシア人の著述家を本書に加えたが、大半の記述は極めて簡略であり、書名などが記載される例はわずかである⁴⁰。

次はギリシア詞華集であり137回であった。ゲスナーはギリシア詞華集を Anthologia Graeca, Florilegia Graeca, Florilegia Planudes などのタイトルで様々に記載している。ギリシア詞華集は古来伝わってきた様々な

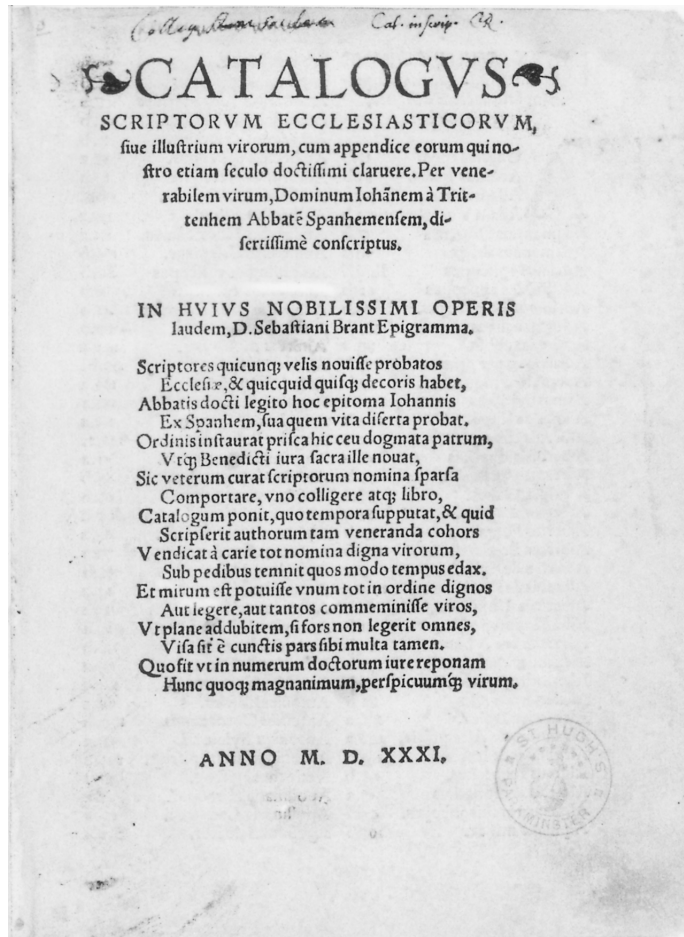


図3 ヨハネス・トリテミアス『聖職にある著者あるいは貴顕なる人々の目録』1531年
ケルン版標題紙 早稲田大学図書館所蔵 (F191-365)

エピグラム集である。最後の編纂が14世紀初めのプラヌデス (Planudes, Maximus) によるもので、7書から構成され多数のギリシアの詩人たちの作品が収録された。ゲスナーが利用した版は1521年のヴェネツィアのアルドゥス (Aldus) 版であり、各書の内容を簡単に記述している (f. 504r)。ギリシア詞華集に収録された詩人たちの項目の記述も簡略なものが多い⁴¹。

ギリシア詞華集と同様に参照されたのがキュ

プリアヌスである。キュプリアヌスは3世紀の人でキリスト教に改宗して間もなくカルタゴ司教に就いた。ゲスナーはキュプリアヌスについてはバーゼルのヨハン・フローベン (Froben, Johann) による1521年版 (ゲスナーは1520年と記述) とリヨンのグリフィウス (Gryphius, Sébastian) による1528年版の著作集に基づいて書簡集について詳細に内容を記述している (ff. 151r-152r)。ゲスナーはこの書簡集に含まれた著述家について項目を立てているが、各

項目の記述は簡略である⁴²。

次に参照されたのがストバイオスである。ゲスナーはBV1を執筆する過程でギリシア語版ストバイオスの校訂を進め、1543年にフロシャウアー印刷所から上梓している。BV1にもそのことが記述されている (f. 182r, f. 456r)。ストバイオスは多数の詩人や散文作家の作品からの抜粋集を5世紀初めに編集し、古典古代作家の有益な引用集として知られた。ストバイオスに引用された作家についてはアテナイオスやスーダにも知られていたため、本書での参照はそれらが優先する場合もある。ゲスナーによるストバイオスに由来する項目の記述も簡略なものが多い⁴³。

次に参照が多かったのはラファエレ・ウォルテッラヌス（ラファエレ・マッフェイ Maffei, Raphaele）である。16世初頭のイタリアの人文主義者マッフェイの著作にはBV1の序文で記述された『人間の学』という書名はなく、実際に利用されたのは人間の学 (Anthropologia) を含む *Commentarius urbanorum* であろう。それは地理学、人間の学、文献学の3書からなる百科事典的著作であった。ゲスナーは古代ギリシア・ローマの著者などを収録するにあたってマッフェイをしばしば参考に行っている。上述のようにゲスナーは1530年バーゼルのフローベン版を所蔵している。マッフェイを参照した項目はアテナイオスやギリシア詞華集と比較して記述が詳細である。

これらの他、ヒエロニムスとゲンナディウスの書誌はトリテミウスの書誌の伝記部分の源泉でありしばしばトリテミウスとともに参照されている。

以上のような参照を付した項目は全体の半数

に達しない数であり、文献が参照されていない項目が実際には多数ある。このような項目の典拠としてゲスナーが大いに利用したのは活版印刷された印刷本そのものであった。ゲスナーは15世紀後半から16世紀前半にかけてスイス、イタリア、フランス、ドイツその他で印刷刊行された書物の出版情報を広範囲に収集していた。特に、同時代のバーゼル、チューリヒ、ヴェネツィア、パリ、リヨン、ケルンなどで活躍した有力な印刷業者の出版物が本書の最も基本的な情報源である。そのことはBV2-1の各分類巻頭でこれらの印刷業者への賛辞を掲げていることから判断できよう⁴⁴。本書に収録された主要な人名について参照文献を調査してみると、やはりゲスナーはかなりの印刷本を見ていたことが明らかになる。表4に8ページ以上にわたる解説がなされた人名項目を列挙して、そこで参照された文献・印刷本を抜き出してみた。これらの中ではガレノスのみ一切の印刷本が参照されておらず、彼が実際にどの版を参照していたかは問題である。ゲスナーの旧蔵書目録にはガレノスの印刷書はバーゼルのクラタンデル (Cratander, Andreas) による1537年ギリシア語版 (Gessner's PL 144)、バーゼルのヴェストハイマー (Westheimer, Bartholomaeus) による1539年ラテン語版 (Gessner's PL 145) の2種類の全集が収録されている⁴⁵。実際にBV1にどれだけの印刷本が著録されているかという問題については、これまで誰も研究したことがない。今後の研究課題となろう。

7. BV1の書誌記述

次に書誌の記述方法について見てみよう。ゲスナーは著者について記述するに当たりいくつ

表4：BV1の主な項目における参考文献・印刷本とその項目のページ分量

著者名	参考文献・印刷本	葉数	ページ分量
Aeneas Sylvius	T.M. 1464; Maffei; Basel: Bebelius, 1533; Nürnberg, 1481; Basel, 1538; Strassburg, 1515.	8r-14r	14
Alexander de Ahrodisiensis	Maffei; Basel: Cratandus, 1537; Basel, 1542.	24r-27v	8
Antoninus Florentinus	Lyon, s.a.; Memmingen, 1483; Nürnberg, 1485.	50r-53v	8
Aristoteles Stagiritæ	Venezia: Aldus, [1494-98]; Basel: Michael Isegrin, 1539.	72v-91v	39
Augustinus Niphus Philotheus Sueffanus	Venezia, 1537; Napoli, 1526; Venezia, 1534; Venezia, 1525; Venezia, 1523; Padua, 1492; Venezia, 1527; Roma, 1537; Venezia, 1521.	105v-109r	8
Aurelius Augustinus	Basel: Officina Frobeniana, 1529; Paris, 1541;	112v-124v	25
Claudius Galenus	Suidas.	169v-174v	11
Conradus Gesnerus	Basel: Robert Winter, 1541; Lyon: Frelon, 1542; Basel, 1540; Zürich: Froschouer, 1542; Zürich, 1544.	179v-183r	8
Desiderius Erasmus	Basel: Hieronymus Froben, 1540.	197v-204r	14
Eusebius Caesareæ	Hieronymus; T. cl. ; Basel: Heinrich Petri, 1542.	231r-236v	12
Flavius Iosephus	Hieronymus; Venezia, 1499; Lyon: Gryphius, 1527; Basel: Officina Frobeniana, 1534; Basel: Officina Frobeniana, 1544; Basel: Henricus Petrus, 1541.	241r-245r	9
Heinrychus Bullingerus	Zürich, 1523; Zürich, 1531; Zürich,: Froschouer, 1530; Zürich,: Froschouer, 1539.	303v-307r	8
Hieronymus Stridonensis	Trithemius; Maffei; Basel: Ioannes Froben, 1524-26.	321v-327v	13
Huldrychus Zwingli	Zürich: Froschouer, 1545.	343v-350r	14
Iohannes Chrysostomus	Trithemius 411; Basel: Officina Frobeniana, 1530.	401v-407v	13
Martinus Lutherus	Wittenberg, 1529 & 1544; Strassburg, 1525.	501v-505v	9

かの記述方法を用いている。それはその人物と文献についてどこから情報を得たかによって区別され、大きく2種類に分けられよう。

- 1) トリテミウスに由来する記述
- 2) トリテミウスに由来しない記述

1) はクレメンスから15世紀末にいたるキリスト教聖職者が対象となり、その記述は著者の

生い立ちから活躍までの略伝、書名と巻数のみの著作リスト、著作に関する若干の説明、死亡の記述の4部からなる。ゲスナーはトリテミウスの記述を単純に引き写したのでなく、略伝については身分・地位、出身国、故郷および活躍した分野などを引用している。一方、著作リストと著作に関する説明は改変せずに抜き出したが、死亡の記述はすべて省いている。その後、印刷本が知られている場合には印刷本の

記述に基づいて著作の概要と目次、さらには前書きもしばしば引用している。つまり、ゲスナーはトリテミウスの記述を換骨奪胎して略伝を短縮し、トリテミウスには知られていないより新しい情報を補足したのである。この記述方法の例は、アエネアス・シルウィウス（Aeneas Syluius）に見ることが出来る（ゲスナーの記述は f. 8r-14r : 図4, 1531年ケルン版でのトリテミウスの記述は図5⁴⁶ : ここでは略伝と著作リストが見られる）。ゲスナーによる記述は次の通りである（f. 8r）。

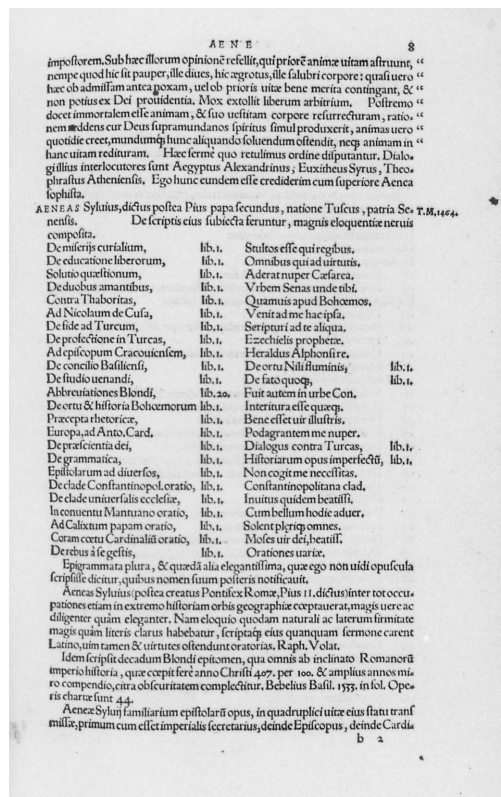


図4 ゲスナー『万有書誌』第1巻 f.8r
「アエネアス・シルウィウス AENEAS Syluius」の項目 早稲田大学図書館所蔵 (F026-36)

AENEAS Syluius, dictus postea Pius papa secundus, natione Tuscus, patria Senensis. Descriptis eius subiecta feruntur, magnis eloquentiae neruis compositae.

アエネアス・シルウィウスは後に教皇ピウス2世と呼ばれたが、トスカーナの人でシエナの生まれである。彼の叙述の範疇は整然と大きな活力のある雄弁さで広く知られている。

そして、すぐにトリテミウスが示した書名と巻数のみの著作リスト（2欄組で全48書）が引用



図5 ヨハンネス・トリテミウス『聖職にある著者あるいは貴顕なる人々の目録』Fo. CXLVr「ピウス教皇 Pius papa」の項目 早稲田大学図書館所蔵 (F191-365)

されている。次にトリテミウスによる2行の解説もそのまま引用されている。

Epigrammata plura, & quæda(m) alia elegantissima, quæ ego non uidi opuscula scripsisse dicitur, quibus nomen suum posteris notificauit.

短詩はさらに多く、その他のものも極めて洗練されているが、彼の名前を後世に知らせたと言われるような著作を私は見ていない。

それに続くトリテミウスの3行の死亡の記述は省かれている。その代わりにこの項目の欄外にT.M. 1464という死亡年が示されている。

次に、トリテミウスの言を受けてアエネアスの著作についての解説となる。初めはマッフエイに基づくアエネアスの地理学研究(historiam orbis geographiæ)を挙げ、そしてゲスナーは彼のローマ帝国史(Romanoru(m) imperio historia)に言及し、「Bebelus Basil: 1533. in fol. Operis chartæ sunt 44. (バーゼルのベベリウス, 1533年, 二折判, 作品の葉は44である)」という印刷者, 印刷地, 印刷年, 判型, 葉数という必要にして十分な書誌情報を記している。続いて、アエネアスの4部からなる「epistolaru(m) opus (書簡集)」を取り上げて「Excusum Norimbergæ in folio, anno 1481. Chartas habet 114 (二折判でニュルンベルク, 1481年刊行, 114葉あり)」という印刷者名を欠いた書誌情報を記述し(f. 8v), 内容注記として書簡集の詳細な目次をf. 9vにかけて記述している。このような著作の解説と詳細な内容が13ページにわたって記述されている。つまり、トリテミウスには知

られていなかったアエネアスの著作がその後印刷刊行されたため、ゲスナーはそれらについて詳しく解説してトリテミウスの欠を補ったことは明らかであろう。

2) の典型的な例としてアリストテレス(Aristoteles Stagiritæ)を見てみよう。BV1で最も長く記述された項目である(f. 72v-91v)(表4参照)。

ARISTOTELIS Stagiritæ opera Græca plæraq(ue) primus excudit Aldus Venetijis in diuersis uoluminibus in folio, adiectis passim Theophrasti quoq(ue) libris. Vltima uero & castigatissima quod sciam æditio Græca prodijt Basileæ ex officina eruditisanè diligentissimiq(ue) typographi Michaelis Isingrinij, anno 1539 in fol: char. 268. Adiectis etiam duobus opusculis de plantis, & uno de uirtutibus.

(スタギリヤ出身のアリストテレスのギリシア語版著作集はほぼヴェネツィアのアルドゥス1世が二折判の数巻本で刊行し、テオフラストスの書をあちこちにまた付け足したものである。我々は、バーゼルの博学で最も慎重なミヒャエル・イーゼングリンの印刷所から1539年に二折判268葉で出たギリシア語版を知っているが、確かに最新で最もすっきりしたものである。しかも植物に関する2書と美德に関する1書を付け足している。)

ここには略伝はなく、著者名, 書名, 印刷地, 印刷者, 印刷年, 判型, 葉数あるいは巻数, 付録物の項目からなる書誌記述が行われている。アルドゥス版には巻次の表記はないが5巻本で

あることは知られていたはずであり、刊行年（1495-98年）も各巻のコロフォンに印刷されていたが、ゲスナーはなぜ明記しなかったのだろうか。

この記述に続いて、f. 73rの1行目から7行目までアリストテレスの極めて簡潔な略伝を記述し、次いでディオゲネス・ラエルティウスによる評価とフィロポノス（Philoponus, Iohannes）による伝記の存在、スーダには伝記は見られない点を指摘する。そして、グアリーノ・ダ・ヴェローナ（Guarino da Verona）やエラスムス（Erasmus, Desiderius）等の近年の学者が言及していない点と、ゲスナー自身がアリストテレスをどのように勉強しているかが語られている。それに続いて、アルドゥス版に基づいてアリストテレスの各書についての内容解説と目次が38ページにわたって記述されている。この著作集に含まれるテオフラストスの書は慎重に省かれている。この部分が詳細な内容注記である。

つまり、ゲスナーはトリテミウスに至るまでの略伝を中心とした中世的な書誌記述の方法を改良して、なるべく略伝を短くして著作とその出版情報および内容を重要視して書誌を編集しようとしている。しかしながら、その例外も見られる。それはゲスナー自身の項目である。彼はf. 179v-183rの8ページにわたって自身の半生と著作について詳細に語っており、ゲスナー研究にとって不可欠の資料となっている。

また、アリストテレスの記述にあるように著作集・全集が刊行されている作家についてはほぼその巻次通りに各巻を詳細に解説し、目次を示し、序文を引用するなどしている。その代表例としては、アウグスティヌス（Aurelius

Augustinus）、エラスムス（Desiderius Erasmus）、ツヴィングリ（Huldrychus Zwingli）などである。

アウグスティヌスを例に説明してみよう。トリテミウスはアウグスティヌスについて1494年バーゼル版ではf. 21r-24r、1531年ケルン版ではf. 26v-30rで詳しい解説を行い、7ページにわたる著作リストと430年の没年を明記している（図6：ケルン版⁴⁷）。しかしながら、ゲスナーはf. 112vから25ページにわたってアウグスティヌスの記述を行っているが、トリテミウスの記述を一切用いていない（図7）。

AVRELIII Augustini Hipponensis episcopi omnia opera, summa uigilantia repurgata à mendis innumeris per Des. Erasmum Roterodamum, cum indice copiosissimo. Excusa Basileæ in officina Frobeniana, anno 1529. in magno folio, chartis 2043. Sunt autem tomi 10. in fol. Eadem rursus totidem tomis Lutetiæ Parisiorum exiuerunt in fol. anno 1541.

（ヒッポの司教アウレリウス・アウグスティヌスの全集はロッテルダムのデシデリウス・エラスムスによって注意を怠ることなく数えきれない誤りからきれいにされた全体であり、豊富な索引を伴う。それはバーゼルのフローベン印刷所で1529年に大型二折判、2,043葉で刊行された。その上二折判10巻である。同様に同数の巻がパリから再度二折判で1541年に刊行された。）（f. 112v）

続いてすぐにフローベン版に基づいて第1巻～10巻までの内容をエラスムスの序文や評価を

ABBAS SPANHEMENSIS		DE SCRIPTORIBVS ECCLIE. Fo.XXVII	
Epistolam ad Sororem li.1. Epistolam ad diuersos li.2.		Soliloquorum. li.2	Volenti mihi multa
Ad Paulinum Nolanum episcopum. li.2.		De moribus ecclesie catholice li.1.	In alijs libris satis opti.
Alia quoq; nonnulla scripsisse dicit, quae ad notitiam meam non venerunt.		De quantitate animae li.1.	Quis videt absidare,
Claruit cum sancto Martino Turonenfi archiepo, sub Archadio & Honorio principibus. Anno dñi. CCCXX.		De libero arbitrio. li.3.	De mihi qua fore.
A ugustinus eps Burdigalensis, vir in diuinis scripturis eruditissimus, & in secularibus suis suo tempore nulli secundus, merito excellentis & profa, non minus sanctitate q̄ eruditioe clarus effulsit, qui apud Treuerim in scilio sub Maximo principe vni cum sanctis Martino, Ambrosio Mediolanensi, & Hieronymo presbytero multam praecleara gessit. Scripsit ibidem existens inter cetera metricae opusculum insignne quod praenotatur.		De magistro. li.1.	Quid tibi videmur
Mosella li.1. De laude eiusdem patrie li.1.		De mulica. li.6	Modus qui pes est di.
Sed & alia multa fert scripsisse opuscula quae ad nos minime venerunt. Claruit sub Maximo. Anno dñi. CCCXX.		De vera religione. li.1.	Cum omnis vitae bonae
A ugustinus eps Hipponensis, natione Carthaginensis in Aphrica, vixit in diuinis scripturis q̄ in secularibus suis oim doctore eruditissimus, sermone disertus, eloquio clarus, sensu profundus, vita & conuersatione sanctissimus. Tanta scripsit opuscula, vt ne minime crediderim oia posse vlegere vel habere. Vnde sine dubio me tunc Guntius, qui se Augustinum inuulisse totum confitetur. Cunctos em̄ scripsit & numero librorum & voluminum fecerit, qui plusq; mille statutus insignes coposuit. Nemo sic profunde sacra scripturae vt Augustinus explanauit. Christianos mores nemo sic vtiliter instituit, nec fide catholicae aliquis eo arctius defendit. Introduxit cum rex in cellam vinaris, tantuq; sortitudo induit, q̄ oēs aduersarios fidei oras suo gladio foretter protulit. Hunc fidoctorem habueris, etiam deficientibus ceteris, sufficit ipse tibi. Nunciatq; de multis libris q̄s & didit, vel paucos configuramus.		De ologintatribus questionibus li.1.	Vtrum aia a scriptis sit.
De sancta Trinitate. li.15	Leclurus haec quae de.	Plalmi contra partē Donati li.1.	Offes qui gaudet de.
De ciuitate dei. li.22	Gloriosissima ciuitate.	Contra Adamantiu. li.1.	Abste ipso praesente,
De praedestinatione sanctorum li.2	Dixisse quidem Apstn.	Demendacio li.1.	De eo qd̄ scriptum est.
In Genesim ad litteram. li.12	Omnis diuina scriptura.	Contra mendacium. li.1.	Magna quae io est de.
In Genesim imperfectus li.1.	De obisaris naturalis.	Ad simplicianum ep̄m li.2.	Multa mihi legenda
De Genesim contra Manichaeos li.2.	Si eligeret Manichaei.	Contra ep̄sam fundamentum li.1.	Gratissimū plane atq;.
De Academicis. li.3	Vtinā Romaniane.	Contra Agone Christiano li.1.	Vni dei vere coipor.
De vita beata li.1.	Si ad philosophiā por.	De doctrina Christiana li.4.	Corona nō promittit.
De ordine quoq; li.3.	De ordine rerum.	Contra partem Donati. li.2.	Sunt praecpta qua d̄.
	Solilo	Confessionum li.13	Qm̄ Donatiū nobis.
		Contra Faustum Manichrum. li.33	Magnus es dñe cētus
		De natura boni. li.2.	Faultus qdem fuit ge.
		Contra Secundinum. li.1.	Honorio Augustio sex.
		Questiones Euangeliorum li.1.	Summiū boni quo fi.
		Propositionū ex ep̄s ad Romān. li.3.	Beneuolentia me qua.
		In ep̄sam ad Galatas li.1.	Qui dicunt mentionē
		Annotatum in iob. li.1.	Hoc opus non ita scri.
		De catechizandis rudibus. li.1.	Sensus hī sunt in ep̄s.
		De confessionum librorum li.4.	In ep̄s quā Apst̄ Pau.
		Contra ep̄sam Parmeniani li.7	Caula p̄ter qua feri.
			Opera magna erāt ei.
			Petitū me frater deo
			Inter oēs diuinas auc.
			Multa quādam alia ad.
			In libris quo aduerfus
			G 3 Cōtra

図6 ヨハンネス・トリテミス『聖職にある著者あるいは貴顕なる人々の目録』 Fo. XVIIr
「アウグスティヌス AVgustinus」の項目 早稲田大学図書館所蔵 (F191-365)

A V R E L I	
de ipsarum vocabulis uolumen insignis, cuius titulus est,	
Tocarius regularis. lib.1. Scripsit & alia quaedam,	
A V R E L I V S Avrelianus Charitus uetus. I. scripsit Libros singulares,	
De rebibus. De officio praefecti praetoris. De munitionibus ciuitatis.	
Ex his decreta quaedam in Digestis legum memorantur.	
A V R E L I I Augustini Hipponensis episcopi omnia opera, summa uigilanti cura,	
gesta a mendis innumeris per D. Petrum Roccoctatum, cum indice copiosissimo. In ecclesia Basilicensi officina Frobeniana, anno 1529. in magno folio, chartis 2045. Sunt autem totius in fol. Eadem rursum totidem totius Lutetiae Parisiorum exiuerunt in fol. anno 1541.	
Index operum Dni Augustini iuxta ordinem decem tomorum, ut Basilicae postremo excusum, anno 1529.	
TOMVS PRIMVS.	
Retractionum libri 2. quibus omnium operum suorum argumenta continentur, eorumq; titulos, tempora & occasionēs & initia notat, adeo nihil praetermissum, ut nec ex quo praefatus Catechumenus, quae uis eius fuerat, quae non agnoscerat, deniq; nec platum uulgari rythmo scriptum in Donati factiōnem perueniret: & quicquid in lingulis ei displicuerat, emendat auer exponit ne quis populum accipiat. Vnam pari diligentia quod exoperat absoluit: epistolas enim & homilias non attigit. Non tamen propterea adulterium haberi debet, quicquid in catalogo non reuectur: certum est enim aliqua post ista retractationes ab eo scripta esse, ueluti librum de haereticis ab Quoduludum.	
Confectionum libri 13. omnem auctoris uitam depingunt, ne malis quidem dicitur simulatas, ac uelut confitentur Deo, minima quoq; nonnulla referentes. Vel, ut ipse scribit, de malis & de bonis meis Deum laudans sustinuit & bonum, inquam excitant humanum intellectum & affectum. A primo usq; ad decimum de me scripti sunt: In tribus ceteris de scripturis sanctis, In principio fecit deus coelum & terram, usq; ad labbati requiem.	
De grammatica liber unus, in quo agitur de nominum declinationibus secundum literarum terminationes, de pronomibus et eorum declinatione, de indoliquarum orationis partium rudimenta explicatur: chartis 4. & 3. quart.	
Principia dialecticae, quae sola remanserit reliquo opere amissio: quod etiam in libris de thetica, geometrica, arithmetica & philosophia sibi conuigite scribit in retractationibus, & eisdem principiis quoq; sibi perijicere, haberi tamen ab aliquibus existimat.	
Categoriae decē ex Aristotelis libro, nō uerba, sed decem chartis 4. & 1. quart. Principia theoreticae, de quibus iam dictum est.	
De musica libri 6. Hos fecit iuxta de musica, quantum attinet ad eam partem, quae rythmus uocatur Medicani scripti primum, & deinde rursum iam baptizatus, & in Africam ex Italia reuersus. Et alibi sextus (ut abbi inquit in retractata) maxime innotuit, quoniam in eorum cognitione digna uisus, quomodo corpus raltus & spiritalis, sed innumabilis numeris peruenitur ad immutabilis numeros, qui iam in ipsa sunt immutabili ueritate, & sic inuisibilia dei per ea quae uelata sunt intellectu conspicuntur, &c.	
Contra Academicos libri 3. Hos primum scribere cepit cum ad Christianam ueritatem se transferent, non dum baptizatus: ut argumenta eorum (ut ait enim ipse) uerba ex retractationibus quae multis iniquis uerba inueniendi desiderant, & prohibent cuiquam reuolentur, & omnino aliquid manifestum, in quantum certum sit approbare sapientem, cum eis omnia uidentur obscura & incerta, ad animo meo, quia & me mouebant, quantum possent rationibus amouerem.	
	De

図7 ゲスナー『万有書誌』第1巻 f.112v「アウレリウス・アウグスティヌス AVRELI I Augustini」の項目 早稲田大学図書館所蔵 (F026-36)

引用しながら25ページにわたって極めて詳細に解説している。ここには著者の略伝や他者による言及、トリテミウスへの言及やその他の参考文献すら記載されていない。

なお、ゲスナーは他の著者の項目でもエラスムス編集・校訂の書物ではエラスムスの序文を好んで引用しており(例えば f. 196r, Demosthenes), ゲスナーのエラスムスに対する敬意がうかがわれる。

8. 図書館所蔵のギリシア語写本についての言及

最後に、ギリシア語文献については印刷本のほかに写本への言及がある。ただし、アリストファネス (f. 71r-72v), アリストテレス, ホメロス (f. 335v-336v), プラトン (f. 563v-564r), プルタルコス (f. 565r-566r) などの写本については一切触れられておらず、アルドゥスのギリシア語版に基づいて著作が解説されている。実際に図書館への言及を見てみよう。

DEMETRII Triclinij inuentum
astronomicum Græce D. Diegus
Hurtadus Cæsaris Venetos legatus habet.

(デメトリオス・トリクリニオスの「天文学発見」のギリシア語[写本]を皇帝のヴェネツィア使節ディーエゴ・ウルタード閣下が持っている。) (f. 195v)

DEMOPHILI cuiusdam liber Graecus de
curatione uitæ, ex Pythagoræ & aliorum
sapientium dictis: Romæ extat in
Vaticana. Sed uerba Graeca in catalogo
unde hæc descripsi corrupta erant: ...

(ピュタゴラスやその他の哲人たちの言った

ことに由来するデモフィリオスの人生の監督についてのあるギリシア語書 [=写本] がローマのヴァティカンにある。しかし、目録に記述されたギリシア語の言葉は不適切であった(以下略)。 (f. 195v)

シチリアのディオドロス (Diodorus Siculus) の写本については以下のように伝えている。

Extant etiamnum Græce præter
impressos, priores quinq(ue) libri, &
reliqui à decimo ad decimumsextum,
Venetijs apud Diegum Hurtadum
Legatum Cæaris:

(印刷本以外に、より古い5巻と10巻から16巻を残すギリシア語[写本]が今でもヴェネツィアの皇帝の使節ディーエゴ・ウルタードのもとにある。) (F. 207r)

次は、ディオオン・クリュソストモス (Dion Chrysostomus) の写本についての言及である。

Dionis Chrysostomi orations 80. D.
Diegus Hurtadus Cæsaris Legatus
Venetijs habet: in alio quodam nescio
cuius Italicæ Bibliothecæ catalogo Dionis
sermone 83. extare legi. ... nec aliud
esse puto uolumen in philosophia morali
huius authoris nomine Venetijs in
bibliotheca SS. Io. & Pauli.

(ディオオン・クリュソストモスの弁論集80書。ヴェネツィアの皇帝の使節ディーエゴ・ウルタード閣下が持っている。どこか私の知らないイタリアの図書館の別な目録にはディオオン

の講話集83書があるということを読んだ。
(中略) ヴェネツィアの聖ヨハネ&パウロ図書館では道徳哲学中にこの著者の名による別の巻があるとは思わない。(f. 208v)

このような図書館におけるギリシア語写本についての記述はBV1には頻繁に見られるが、最も頻繁に言及されている図書館はディエゴ・ウルタード・デ・メンドーサの図書館とヴァティカン図書館である。前述のようにゲスナーは序文でベッサリオンの図書館も挙げているが、彼がヴェネツィアを訪問した1543年当時はベッサリオンの旧蔵書はまだ公開されておらず、ゲスナーは1468年に作成された目録かあるいは1543年に作成された記述の不十分な目録を参照したと思われる⁴⁸。ホブソンは、メンドーサはこの蔵書には自由に接することができたと述べて⁴⁹、ゲスナーが利用できた可能性を示唆しているが、BV1ではこの旧蔵書に含まれるギリシア語写本についての言及はほとんどなく、実際にはどれだけ利用できたかは明らかでない。

このようにゲスナーはギリシア語写本について図書館の所蔵を記録して本書に大きな特徴を与えているが、ラテン語やヘブライ語の写本についてはほとんど言及していない。この点で本書が写本の総合目録とする見解はまったくの誤りであることは明らかであろう。

9. まとめ

以上、BV1について書誌学的な研究によって判明したことをまとめ、そして今後の課題について述べてみたい。

まず、BV1に収録された著者名は従来の見解のように約3,000名ではなく約5,200名あるい

はそれ以上である。著者と著作の情報源は、BV1の序文末尾で列挙した図書館と蔵書目録、同時代の参考文献ばかりでなく、そこでは言及されなかったアウクスブルク、ウィーン、ハイデルベルクの図書館とその目録、さらにスーダ、アテナイオス、ギリシア詞華集、キュプリアノス、ストバイオスなどの古典文献、印刷所の目録等を渉猟してすでに失われた書物や文書を加えて、16世紀としては圧倒的多数の文献情報を得ることができたのである。

しかしながら、ゲスナーは本書の編集においてA-Iの前半とK-Zの後半で執筆方針を変えて、前半で相当長く詳述した著作の内容の記述を後半ではかなり短縮している。これはおそらく時間的な余裕がなくなり、執筆を急いだためと考えられる。また、分類目録も医学の分類が未刊となり、さらに主題索引も完成できず未完成な目録となってしまった。ゲスナーの仕事を継承したジئمラーもフリースもその欠を補うことができなかった。

そして、著者の記述方法ではヒエロニムス以来の伝統でありトリテミウスによって完成された著者略伝を主体とする書誌記述を改め、略伝をなるべく短くするか省略して著作についての記述を重要視した。ゲスナーはトリテミウスが示した書名・巻数からなる簡単な著作リストをそのまま引用する場合があるが、一方ではトリテミウスに収録されていない著者やトリテミウスに収録されていても印刷本が参照できる場合には積極的に印刷本の情報を取り上げている。その記述要素は基本的には著者名、出身地、職業あるいは専門分野というトリテミウスも行っているもののほかに、書名、巻数、印刷地、印刷者、印刷年、判型、葉数、内容解説、目次、

序文からの引用などである。つまり、彼が採用した記述方法は中世的な書誌記述を脱却して、近代的な書誌記述に近づいていることが明らかになる。この点は本書の大きな特徴である。それ故にゲスナーは近代書誌学の父と呼ぶにふさわしいのである。

一方、BV1には図書館の所蔵情報が随所に掲載されているが、その対象はギリシア語写本であり、ラテン語やヘブライ語の写本についてはほとんど触れられていない。それはゲスナーがギリシア語学者としてギリシア語文献に多大な関心をもっていたからである。それ故、本書が写本目録を目指して執筆されたものでないことは明らかである。むしろ、彼が標題に述べたようにラテン、ギリシア、ヘブライ語で執筆された古今の文献で現存するもの、しないもの、学術的、非学術的、印刷出版されたもの、特にギリシア語の写本で図書館に所蔵されているが出版されていないものも含めたあらゆる書物の著者を収録した目録であることが明らかになった。

それでは今後の課題であるが、まずは収録された書物の数量の問題である。これまで見てきたようにゲスナーの様々な記述から書物数を算定するには大きな困難があることが判明する。つまり、トリテミウスによる著作リストとゲスナー独自の記述では書物のとらえ方が異なっているからである。トリテミウスは単純に書名を列挙するが、それは1冊の書物の場合もあるし1論文の小編の場合もある。しかし、ゲスナーは同じ書物の諸版を数多く列挙しており、また印刷された全集や著作集も多数記述し、一方で写本も記載しているため、書物をどのような基準で1点とカウントすればよいのか判断が非常

に難しい。したがって、現時点ではフィッシャーのように「数万点」とするほかはなからう。むしろ、セッライが具体的な数字を示したBV2-1とBV2-2に見られる loci の数から書物の点数をカウントするほうがより具体的であろう。しかし、第20類の医学書についてはBV1から抽出するほかはないのである。

したがって、より実際の書物の点数を知るためには、BV1、BV2-1、BV2-2、あるいは後続する Appendix, Epitome に著録された著者、その専門分野、タイトル、印刷出版された書物の書誌情報、内容細目、参照文献、図書館所蔵情報などについてさらにデータを精査しながらデータベース化を図り、そこから回答を得るほかには方法はなからう。もしこのようなデータベースが構築されれば、16世紀にゲスナーが知り得たヨーロッパの文献情報を正確に把握することができるようになり、当時の学問文化、文献の引用関係、印刷出版事情などをより具体的に研究するためのリソースとなるはずである。すなわち、今後の課題は『万有書誌』データベースの構築であり、どのような方法でそれが可能になるかを具体的に検討することであろう。

注

1. Wellisch, H. H., How to make an index – 16th century style: Conrad Gessner on indexes and catalogs, *International Classification*, 8 (1981), no. 1, p. 10.
2. BIBLIOTHECA | Vniuersalis, siue Catalogus omni= | um scriptorum locupletissimus, in tribus linguis, Latina, Graeca, & Hebraica: extantium & non extantiu(m), ueterum & recentiorum in hunc usq(ue) | diem, doctorum & indoctorum, publicatorum & in Bibliothecis laten= | tium. Opus nouum, & no(n) Bibliothecis tantum publicis priuatisue in= | stituendis necessarium, sed studiosis omnibus cuiuscunq(ue) artis aut | scientiæ ad studia melius formanda utilissimum: authore | CONRADO GESNERO Tigurino doctore medico. | [device] |

TIGVRI APVD CHRISTOPHORUM | *Froschouerum Mense Septembri, Anno* | M. D. XLV. Folio, 650 leaves, ff. [8], [10], 1-631, [1].

3. PANDECTARVM SIVE | Partitionum uniuersalium Con | radi Gesneri Tigurini, medici | & philosophiae professo | ris, libri XXI. | AD LECTORES. | SECVNDVS hic BIBLIOTHECAE nostræ Tomus est, totius philosophiæ | & omnium bonarum atrium atq(ue) studiorum Locos communes & Ordines uniuersales simul & particulars complectens. ... | [7 lines] | Librorum enumeration sequente pagina continetur. | [device] | TIGVRI EXCVDEBAT CHRISTOPHORVS | Froschorerus, Anno M. D. XLVIII. Folio, 384 leaves, ff. [6], 1-374, [2].
4. PARTITIONES THEO= | logicæ, Pandectarum Vniuersa= | lium Conradi Gesneri | liber ultimus. | AD LECTOREM. | PANDECTIS nostris siue secundo Bibliothecæ Tomo, cuius libri XIX. Nuper editi | sunt, sacrosanctam Theologiam ... | [4 lines]. | ACCEDIT Index Alphabeticus præsentis libra & superioribus | XIX. Communis, qui tertij Tomi olim promissi | uicem explebit. | [device] | CHRISTOPHRVS Froschouerus excudit Tiguri, | Anno M. D. XLIX. Folio, 180 laves, ff. [8], 1-157, [15].

5. 『万有書誌』を基にしながらかゲスナーの許可なくリュコステヌス(Lycosthenus, Conradus)が勝手に編集した簡略版の書誌(*Elenchus scriptorum omnium*)が1551年にバーゼルで刊行され、一方、1555年にはゲスナーの許可を受けてジンムラー(Simmeler, Josias)が補遺版 *Appendix Bibliothecae Conradi Gesneri* とリュコステヌス改定版 *Epitome bibliothecae Conradi Gesneri* をともにチューリヒのフロシャウアーから刊行した。また、同年にはパリでコンスタンティン(Constantin, Robert)が『万有書誌』に収録されたもののうちフランス・英国の図書館にある写本・印刷本の著者名索引(*Nomenclator insignium scriptorum*)を編集刊行している。さらに、ジンムラーは1574年にも *Epitome* の改定増補版を著し、1583年にフリース(Fries, Johann Jacob)はさらにその改定増補版を刊行している(両版ともフロシャウアー印刷所刊行)。それ以降も18世紀に至るまで補遺版の刊行が続いた(Wellisch, H. H., *Conrad Gessner: a bio-bibliography*, Zug: IDC, 1984, pp. 50-54)。
6. Bay, J.C., Conrad Gesner (1516-1565), the father of bibliography: an appreciation, *The Papers of the Bibliographical Society of America*, 10 (1916), pp. 53-86. 一方、Besterman はトリテミウス(Trithemius, Johannes)を“Father of Bibliography”と呼びその理由を説明している。(Besterman, T., *The beginnings of systematic bibliography*, Oxford: Oxford University Press, 1935, pp.6-10)。ちなみに、戸田慎一は「書誌の父」と呼んでいる(戸田慎一、「コンラ

ト・ゲスナー：その生い立ちから青年期まで」、『書誌索引展望』, 9巻3号(1985), p. 1)が、ゲスナー以前から多数の書誌が存在しているためこれは適切ではない。

7. 中でもセッライの研究は最も詳細である(Serrai, A., *Corad Gesner*, Roma: Bulzoni Editore, 1990, pp. 99-202)。
8. ハンス・フィッシャー、『ゲスナー：生涯と著作』(今泉みね子訳), 博品社, 1994.
9. Bay, op. cit., p. 59; Schazmann, P. E., Conrad Gesner et les débuts de la bibliographie universelle, *Libri*, 1952, 2 (1952), pp. 39-40; 戸田, 前掲論文, p. 7.
10. Escher, H., Konrad Gessner über Aufstellung und Katalogisierung von Bibliotheken, *Mélanges offerts à Marcel Godet*, Neuchâtel: Attinger, 1937, S. 119; フィッシャー, 前掲書, p. 34; Bernstein, L. F., The bibliography of music in Conrad Gesner's *Pandectae* (1548), *Acta Musicologica*, vol. 45, fasc. 1 (1973), p. 122.
11. Wellisch, H. H., *Conrad Gessner*, p. 32.
12. Schazmann, op. cit., p. 44; Hobson, A., *Renaissance book collecting: Jean Grolier and Diego Hurtado de Mendoza*, their books and bindings, Cambridge: Cambridge University Press, 1999, p. 73. なお、Bay はフランクフルトではなくライプツィヒであるとするが(Bay, op. cit., p. 63), 当時のフランクフルトとライプツィヒの大市における書物の集積状況を考慮すればやはりフランクフルトであろう。
13. 収集した印刷業者の出版目録は『万有書誌』の基本的な情報源となった。BV2-1の各分類の冒頭で同時代の印刷業者を称賛しその目録を提示している(cf.: Luts, H., Konrad Gesners Beziehungen zu den Verlegern seiner Zeit nach seinen Pandekten, *Mélanges offerts à Marcel Godet*, Neuchâtel: Attinger, 1937, S. 109-117; Serrai, op. cit., pp. 116-134.)。また、同21葉表でも印刷業者の目録に言及している。
14. Hobson, op. cit., pp. 73-74.
15. フィッシャーは1544年夏としている(フィッシャー, 前掲書, p. 33)が、Hobson は1543年としている(Hobson, op. cit., p. 77)。
16. Escher はポローニャの聖救世主聖堂図書館については目録を参照したとするが(Escher, H., Die Bibliothek universalis Konrad Gessner's, *Vierteljahreschrift der Naturforschenden Gesellschaft in Zürich*, 79 (1934), S. 180), ゲスナーはアレクサンドリアのヘロン(Heron Alexandrinus)による挿絵入りの軍事機械に関する本をポローニャのこの図書館で見たと述べている(f. 319v)。
17. フィッシャー, 前掲書, pp. 41-42.
18. 例えば, f. 514r では Moschion と Moschi Siculi の2つの項目でギリシア語写本がアウクスブルクの図書館にあると述べている。
19. 例えば, 序文末尾で列挙した本書の参考文献の一つである Lili Gregorij Gyraldi historia poetaru(m) dialogis はバーゼルでミハエル・イーゼンゲリンが1545

- 年に刊行したものであり(*6v), ゲスナーが最も敬愛する宗教的指導者ツヴィングリ(Zwingli, Huldrych, 1484-1531)の著作集は1545年にチューリヒのフロシャウアーから刊行されている(f. 344r)。また、バーゼルのオポリン(Oporin, Johan)が1545年に刊行したルキアノスも収録されている(f. 484r)。
20. Escher, H., *Die Bibliothek universalis Konrad Gessner's*, S. 179.
21. Besterman, op. cit., pp. 14-20.
22. Mayerhöfer, J., *Conrad Geßner Bibliograph und Enzyklopädist : der Zusammenbruch der mittelalterlichen artes liberales*, *Gesnerus*, 22 (1965), S. 178.
23. フィシャー, 前掲書, p.36.
24. Bernstein, op. cit., p. 122.
25. Wellisch, op. cit., p. 10.
26. Serrai, A., op. cit., pp. 72, 74.
27. Ibid., p. 201.
28. 宇田川榕菴, 『復刻「善多尼訶経」附「植學啓原」解説』(大賀一郎解説), 井上書店, 1965。
29. 南方熊楠, 『南方熊楠全集7』, 平凡社, 1971, p. 127。
南方熊楠, 『南方熊楠日記第1巻』, 八坂書房, 1987, p. 224。
30. 戸田慎一, 前掲載論文。
31. 渋川雅俊, 『目録の歴史』, 勁草書房, 1985 (図書館・情報学シリーズ9), p. 109。この「約1,000点」は10,000点の誤植ではなからうか。
32. 雪嶋宏一, 「コンラート・ゲスナーの生涯と著作」, 『ピヌス』42 (1996), p. 24。
33. 藤野幸雄, 『図書館史・総説』, 勉誠出版, 1999 (図書館・情報メディア双書1), p. 90。
34. 中山愛理, 「近世の図書館」, 『図書及び図書館史』, 日本図書館協会, 2010 (JLA 図書館情報学テキストシリーズII12), p. 67。
35. Vischer, M., *Bibliographie der Zürcher Druckschriften des 15. und 16. Jahrhunderts*, Baden-Baden: Verlag Valentin Koerner, 1991, S. 544.
36. 例えば f. 29r では, ALFONSVS. Vide Alphonsus. とある。
37. ゲスナーがここにリストアップした書物をドイツ16世紀刊本目録VD16データベースで実際に検索し版を確定して記載した (<http://www.bsb-muenchen.de/16-Jahrhundert-VD16.180.0.html>, 参照2010-10-25)。また, ゲスナー旧蔵書に該当するものにはその番号を付した (cf.: Leu, U. B., Raffael Keller, Sandra Weidmann, *Conrad Gessner's private library*, Leiden: Brill, 2008) (Gessner's PL と略)。
38. Besterman, op. cit., p. 7.
39. *The Oxford classical dictionary*, 3rd ed. Oxford: Oxford University Press, 1996, p. 202.
40. 例えば, f. 28v では, ALEXANDRIAE poetæ fabulas citat Athenæus, quatuor in locis. f. 207r では, DIODORVS Erythræus Ephemerides Alexandri scripsit. Athenæus lib. 10., また DIOGENIS Tragicus Semelen Athenæus citat. とある。f. 208v では, DIONYSIOCLES quida(m) dipnosophista ab Athenæo introducitur in Symposiacis. とある。
41. 例えば f. 68r では, ARABII scholastici epigrammata 7. in Florilegio Planudis, libro 4.とあり, f. 206v では, DIOSCRIDIS cuiusdam Distichon in 4. libro Anthologij. とある。
42. 例えば f. 163v では, CASSII a Macomadibus uerba apud Cyprianu(m) in sententijs episcoporu(m) de hæreticis baptizandis. とある。また f. 195r では, DEMETRIVS quidam, author secundæ & duodecimæ epistolæ apud Cyprianum lib. 1 cum alioquot alijs coepiscopis. とある。
43. 例えば f. 161v では, CARCINI fabulæ a Stobæo citantur. De duobus Carcinis Tragicis lege Suidam.
44. Serrai, op. cit., pp. 116-134.
45. Leu, Keller and Weidmann, op. cit., pp. 120-121.
46. Trithemius, Johannes. *Catalogus scriptorium ecclesiasticorum*. Coloniae: Petrum Que[n]tell, 1531, f. CXLVr.
47. Ibid., ff. 26v-27r.
48. Labowsky, L., *Bessarion's Library and the Biblioteca Marciana: six early inventories*, Roma: Edizioni di Storia e Letteratura, 1979, pp. 147-189, 291-325.
49. Hobson, op. cit., p. 74.